

2025.4.20.イースター礼拝

「なぜ泣いているのか」

旧約 列王記上 17章 17～24節

新約 ヨハネによる福音書 20章11～18節

1. はじめに

イエス様の御復活を喜び祝う、イースターの礼拝を捧げています。今朝与えられている御言葉は、イースターの朝、マグダラのマリアが復活されたイエス様と出会った時のことが記されています。聖書には、その出来事を経験した本人しか知らないようなことが良く記されています。例えば、ペトロの三度否みの記事です。このペトロがイエス様を三度知らないと言ってしまったという出来事は、それが起きた時には、ペトロの周りにはイエス様の弟子は誰もいなかったのですから、ペトロ本人が話さなければ誰にも分からないことでした。しかし、4つの福音書全てにこの出来事は記されています。それはペトロがこのことを話したからです。きっと、何度も何度も話したと思います。ペトロにとって、あの出来事は決して忘れるこの出来ない出来事でしたし、イエス様の愛と赦し、そして自分の弱さと罪を語る時には、どうしても語らないわけにはいかないことだったからです。キリストの教会において、イエス様の弟子の筆頭であるペトロがイエス様を三度知らないと言った、イエス様を裏切ってしまった。それは隠したいこと、誰にも言いたくないこと。そう思われるかもしれません。しかし、ペトロは語りました。語り続けました。「私の恥は神の栄光」という言葉があります。ペトロは自分の弱さ、情けなさを語ったわけですが、それを語ることによって、それでも赦され、生かされ、用いてくださるイエス様の愛と恵みと真実をいよいよはっきり告げることになりました。

今朝与えられているマグダラのマリアと復活のイエス様との出会いの場面もそうです。彼女は復活されたイエス様と最初に会った人です。彼女は、この日の出来事を何度も語ったでしょう。空の墓を見てもイエス様が復活されたとは少しも思わなかったこと、復活のイエス様と出会ってもイエス様とは全く気が付かなかったことなど、この日の出来事をマグダラのマリアは少し笑いながら、喜びをもって何度も語ったに違いないと、私は思います。この日から彼女は復活の出来事を少しも疑うこと無く証する者として立てられたことを喜び、何度も語り続けたことでしょう。

2. 空の墓

イエス様は十字架の上で金曜日に息を引き取られ、日没までにその遺体は墓に納められました。金曜日の日没から土曜日の日没まで安息日ですから、イエス様が処刑されたこともあり、自分達

にも累が及ぶことを恐れて、弟子達は部屋から出ないで過ごしたのではないかと思います。そして、日曜日の朝、イエス様の弟子である婦人達がイエス様の墓に向かいました。確かに、安息日は土曜日の日没で終わっていますけれど、夜にお墓に行くというのは、気分の良いものではないでしょう。マグダラのマリアは安息日が終わった週の初めの日の朝早く、イエス様の墓に向かいました。ほかの福音書を参考にすれば、マグダラのマリアはこの時一人ではありませんでした。何人かの婦人達と一緒にいました。彼女達は十字架に架けられたイエス様を最期まで見届けました。イエス様が十字架の上で息を引き取られた後、イエス様の遺体がアリマタヤのヨセフによって引き取られ、十字架から降ろされ、墓に葬られるのを確認しておりました。ですから、マグダラのマリアと他の婦人達は迷うことなくイエス様の墓に着きました。しかし、イエス様の遺体を納めたはずの墓を塞いでいた石は取り去られ、墓の中にイエス様の遺体はありませんでした。墓の中にあったのは、イエス様の遺体を包んでいた亜麻布だけでした。

イエス様は弟子達に、十字架に架かって死んだ後、復活するということを何度も予告していました。しかしこの時、弟子達もマグダラのマリアも、イエス様が復活されたとは全く考えてもいませんでした。マリアはシモン・ペトロの所に行ってこう告げました。2 節「**主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。**」マリアの頭にとっさに思い浮かんだのは「盗まれた」ということだったのでしょう。これが自然な、合理的な考え方です。ペトロと「もう一人の弟子」（ヨハネと受け止めて良い）は、マリアの知らせを受けて墓に来ましたけれど、イエス様の遺体がないことを見届けて、家に帰って行きました。

3. 「墓の中から」と「墓の外から」

マリアはイエス様の墓に残りました。そして、泣いていました。金曜日からマリアはずっと泣いていました。イエス様が捕らえられたと聞けば泣き、イエス様が鞭打たれれば泣き、イエス様が十字架を背負って歩けば泣き、イエス様が十字架に架けられれば泣き、イエス様がみんなにのしられれば泣き、息を引き取られれば泣きました。そして今、イエス様の墓に来ると、イエス様の遺体がない。マリアは何が起きたのか分からず、イエス様の遺体にすがりつくことも出来ず、これからどうすれば良いのかも分からず、マリアはただ泣くしかありませんでした。「ただ泣くしかない」そういう時が、私共は人生の中で何度か味わいます。愛する者の死は、誰もが経験するそのような時でしょう。

この時、「マリアは墓の外に立って泣いていた。」(11 節)と聖書は告げています。少し変な言葉です。普通なら、「マリアは墓の前に立って泣いていた」と記すところでしょう。しかし、聖書は「墓の外に立って」と記します。マリアは墓の外から、墓の中を見て泣いていたということでしょう。これは、「墓の中」にいた者と対比して、このような表現になっていると考えられま

す。この時、墓の中において、墓の中から外を見ている者がいた。それは「**白い衣を着た二人の天使**」(12 節)でした。二人の天使はイエス様の遺体の置かれてあった所の、「**一人は頭の方に、もう一人は足の方に座って**い」ました。ちなみに、当時のユダヤのお墓は、横穴です。天使たちは泣いていません。マリアは泣いていました。

4. 「なぜ、泣いているのか」

この時、天使がマリアに声を掛けます。「**婦人よ、なぜ泣いているのか**」(13 節) 何とも無神経な言葉です。愛する者が亡くなり、ただ泣くしかない状態の人に対して、こんな言葉をかける人なんていません。この言葉は、言葉が無神経なだけではなくて、この声のトーンも明るかった。もっと言えば、少し笑いを含んでいるような言い方だったと私は思います。墓の外に立ち、墓の中を見ているマリアには、イエス様の遺体がなくなった、ただ亜麻布だけがある空の墓しか見えません。しかし、墓の中から見るとどうなるでしょうか？墓の中から見ると、泣いているマリア、そしてその後ろに立っておられる復活されたイエス様が見えていたわけです。ですから、天使たちは「**なぜ泣いているのか。泣く必要なんかない。あなたがイエス様の遺体がなくなったと**いって泣いているなら、そんな必要は全くない。イエス様は復活されて、今、あなたの後ろにおられるのではないか。」そう天使たちはマリアに告げたのです。

しかし、マリアにはこの天使たちの言おうとしていることが、全く分かりません。それで天使たちにこう言ったのです。「**わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。**」(13 節) マリアはイエス様が復活されたなんて、全く思っていない。ただ泣くばかりでした。

ここに、復活を知っている天使と復活を知らないマリアの決定的な違いがあります。

5. 見ても分からない

マリアはここで後ろを振り返ります。理由は分かりません。朝日が昇ってきて、イエス様の影にマリアが気付いたからかもしれません。マリアは復活されたイエス様を見ます。ところが、マリアはそれがイエス様だと気付きません。イエス様はマリアにこう告げます。「**婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。**」天使が告げた言葉と同じです。この時のイエス様の声は、天使たちと同じように、明るいトーンだったでしょう。しかし「**誰を探しているのか**」という言葉は、「あなたが探しているのは私でしょ。誰を探しているの。私はここにいるよ。もう泣かなくていい。」そういう言葉でした。マリアはそれでも気付きません。復活されたイエス様を園丁だと思って「**あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。**」(15 節) と言いました。マリアのイエス様への思いがとて

も良く現れている言葉です。

しかし、どうしてマリアは復活のイエス様に出会っても、それがイエス様だと気が付かなかったのでしょうか。色んな説明がありますけれど、大切な点は二つあります。一つは、復活ということは、人間の受け入れることの出来る範囲の外にあって、たとえ目の前でそれがあったとしても受け入れることが出来ない程に「あり得ないこと」と人は思っている。死んだ人間が復活するはずがない。死んだらお終い。それは、水が低い所から高い所に向かって流れるようにあり得ないこと。その様に思っていたマリアには、復活されたイエス様を見ても、それがイエス様だとは認識出来なかつたということだろうと思います。「復活」とは、それ程までに信じる事が出来ない、常識の外にあることだからです。皆さんの中で、イエス様の復活の話を聞いて、すぐに信じたという人がいますか？私は「何を馬鹿なことを言っているのか。」と思いました。「キリスト教というのは、全く話にならない。」そう思いました。18歳で教会に初めて行った時の正直な感想です。そして、20歳で洗礼を受けたのですけれど、それから10年ほどは正直なところ、復活ということはピンときませんでした。まだ若く、死ということ自体が自分には関係ないと思っような時でしたから、その先の復活なんて全くピンときませんでした。しかし、今は違います。愛する者を何人も天に送り、自分の地上での命もどれだけあるか分からないという年になって、この復活こそが私共の希望だと受け止めるようになりました。このイエス様の復活から、キリスト教は始まりました。復活がなければ、私共に希望はありません。復活に、肉体の死によっても滅びることない命の希望があります。この希望は、すぐに消えて無くなるような淡い希望ではありません。どんな困難や苦しみや悲しみによっても消すことの出来ない希望です。それは「強靱な希望」です。私共を生かす「力ある希望」です。

6. 「マリア」「ラボニ」

さて、マリアが復活されたイエス様を見ても分からなかつたもう一つの理由は、イエス様の復活という出来事は、単に肉体が蘇生するというのではなくて、イエス様との人格的な交わりが肉体の死を超えて途切れない、そういう出来事だったということです。復活と蘇生とは違います。肉体の蘇生というのは、ラザロの復活（ヨハネによる福音書 11 章）や会堂司ヤイロの娘の復活（ルカによる福音書 8 章 40 節以下）のようなものです。ラザロも会堂司ヤイロの娘も、確かに死んでいたのに甦りました。しかし、この二人が今も生きているというわけではありません。イエス様の復活は、永遠の命による復活であり、イエス様は今も生きて働いておられます。

復活のイエス様を見ても分からなかつたマリアでしたけれど、イエス様に「マリア」（16 節）と声を掛けられると、マリアは園丁だと思っていた人がイエス様であることがはっきり分かり「ラボニ」（16 節）と応えました。ラボニとは「先生」という意味ですけれど、これはイエス様と一

緒に旅をしている間、ずっとイエス様に対して呼びかけていた言い方でした。「マリア」と呼ばれたその声、その響き、これは間違いなくあのイエス様の声だ。マリアはすぐに分かりました。そして、反射的に「ラボニ」とマリアは応えました。この時のマリアの声は喜びにあふれていたに違いありません。「マリア」「ラボニ」と呼び合う関係、イエス様とマリアとの関係が、十字架の死によっても断ち切れなかったことを示しています。イエス様の復活の記事は、イエス様が十字架にお架かりなる前に交わりがあった人達に対して復活のイエス様とその御姿を現されたということが記されているのであって、イエス様の事など関心もなかった人達に、通りや市場でイエス様が復活の御姿を現されたということは記されていません。実に復活とは人格的な交わり抜きに受け止めることが出来ない、別の言い方をすれば、イエス様を愛し、わが主・わが神と信じなければ分からない、そういう出来事なのです。

7. すがりつくのはよしなさい

マリアは目の前に復活のイエス様がおられることが分ると、思わずイエス様にすがりつきましました。本当に嬉しかったからです。イエス様はヨハネによる福音書によれば、13章以降最後の晩餐の席上で長い説教をされました。その中で16:20「**はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。**」と告げられました。「**あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。**」とは、イエス様が十字架にお架かりになられて死ぬことを指しています。イエス様の十字架の死を、人々は喜んだ。しかし、弟子達は泣いて悲嘆に暮れました。マリアがまさにそうでした。しかし、イエス様は続けて「**その悲しみは喜びに変わる。**」と告げられました。まさに、マリアは復活のイエス様に出会って、その悲しみは喜びに変わりました。復活とは、「悲しみが喜びに変わる」出来事であり、復活を信じる者は、この死によっても打ち破られることの無い喜びと共に生きる者になるということです。悲しみを喜びに変えていただいた者として生きるということです。

イエス様は自分にすがりつくマリアに「**わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。**」(17節)と告げられました。ちょっと、「冷たいんじゃないの」と思われる方もいるかもしれません。しかし、このイエス様の言葉は、復活して終わりではない。次があることを示しています。それは昇天、そしてペンテコステと続く神様の救いの御業です。十字架が大事だ、いや復活が大事だ。そういうことではありません。クリスマスの御降誕、イエス様の御業と言葉、十字架、復活、昇天、聖霊降臨。これは一連の救いの御業です。それぞれに意味がありますが、この中の一つだけを切り抜き、取り出しても、十分に神様の救いの御業を受け止めることは出来ません。その救いの御業全体から、神様の力と御心と愛と恵みと真実を受け止めていくということです。

8. 私は主を見ました

イエス様は復活された御自身をマリアに示すために「マリア」と呼ばれました。これはいつの時代でも、どこにおいても起き続けている出来事です。イエス様は名を呼ばれます。今朝もイエス様は、私共一人びとりの名前を呼んでくださり、「私だ。私は生きている。ここにいる。」そう語られます。復活のイエス様と出会ったマグダラのマリアは、弟子達の所に行って「**わたしは主を見ました**」(18 節)と告げました。そして、復活のイエス様に最初に出会った者として、イエス様の復活の証人として、生涯、この日の出来事を何度も何度も語り続けたに違いありません。私共も又、復活のイエス様に出会い、言葉を受け、御業を為していただいた者として、私の証言、私の物語を与えられているでしょう。それを語り続けてまいりましょう。

お祈りします。

恵みと慈愛に満ちたもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、御言葉によりイエス様の御復活の出来事を覚えさせてくださいました。感謝します。イエス様は、十字架の上で死んで、三日目に復活させられました。肉体の死では終わらない命があることを示してくださいました。そして、その命に私共も与る者としてくださいました。私共も私共が愛する者も、やがてこの肉体の命は終わりを迎えます。しかし、それが私共の命の終わりではありません。私共はイエス様の復活の命と一つとしていただいたからです。どうかこの恵みをしっかり受け止め、この恵みを語り伝える者として、私共を強め、用いてってください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン